九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『存在と時間』における真理概念について

廣田, 智子
九州大学大学院 : 博士後期課程 : 哲学

https://doi.org/10.15017/1446185

出版情報：哲学論文集. 47, pp.85-101, 2011-10-01. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

『存在と時間』における真理概念について

廣田智子

はじめに

ハイデガーは『存在と時間』[1]第四十四節において「知性と事物との一致（adaequatio intellectus et rei）」（SZ, 215）として理解されてきた伝統的真理観を批判する。ハイデガーによれば、そもそも観念的な判断の内実と実在的な事物との一致を問うという問題構成自体が疑わしいものである。こうした伝統的な真理観は事物的に存在する主観と客観とを素朴に前提したうえで両者の「間」や「交ワリ」を合成しようと試みるものであり、つねにすでに世界の内で存在者へと関わっている現存在の世界内存在という現象を「爆破する」ことになってしまう（SZ, 132）。さらにハイデガーは、「外的世界」は実在するのか、またそれは証明可能かということについて問う伝統的な「実在性の問題」（SZ, 206）を批判し、「『哲学のスキャンダル』は、この証明がこれまでまだなされていないという点にあるのではなく、そうした証明がたえず期待され試みられているという点にある」（SZ, 205）[2]とすら述べる。

伝統的真理概念を批判し、さらに実在問題の無効をすら宣告するハイデガーは、そもそも存在者が発見されることを可能にする世界が開示されていること、すなわち開示性を根源的真理とする。しかしながらその真理概念は、真偽の区別を無効にするものとしてトゥーゲントハットによって批判されている。本稿ではハイデガーの述べる真理を考察し、いかなる意味において現存在の開示性が「真理」であるのかを明らかにしたい。

論述の順序としては、まず、ハイデガーによる伝統的な真理論への批判とトゥーゲントハットによるハイデガー真理論への批判を確認して、諸々の真理論の課題を確認する（第一章）。次に、『存在と時間』における存在者の「自体存在」についての議論を検討し（第二章）、世界内存在を地盤とした日常的な理解である解釈学的「として」からどのようにして認識論的な命題的「として」が派生してくるのかを明確にする（第三章）。最後に、真理と非真理とは等根源的に真理であるとするハイデガー真理概念を、伝統を排斥するのではなく伝統を「我がものとする」ものとして示す（第四章）。

一　ハイデガー真理論の問題構成

ハイデガーの真理論は、「陳述が真である」とは陳述が存在者をそのものの被暴露性において「見えるようにさせる」ことであるとし、陳述の真であること、つまり真理とは「暴露しつつあること（entdeckend-sein）」（SZ, 218）であると規定する。存在者を「暴露しつつあること」は世界内存在としての現存在の開示性に存在論的にはもとづいているので、「開示性（Erschlossenheit）」を真理の根源的現象として捉える（SZ, 220ff.）。しかしながらこのハイデガーの真理概念はトゥーゲントハット[3]によって批判されるところである。トゥーゲントハットはハイデガーが真理概念について記述しているいくつかの箇所を挙げて、記述の変化を指摘している。それによればハイデガーの「第一の」真理の定式化は、「言明が真であるのは、この言明が存在者を、『この存在者が自分自身に即して存在している通りに（so, wie es an ihm selbst ist）』提示し、

暴露するときである」（T, 332）というものである。だが、彼によれば、第一の定式化が第二、第三の定式化へと置き換えられるなかで、ハイデガーは真理の重要な規定を欠落させる。第三の定式化は「言明が真であるということは、暴露しているということとして理解されなければならない」（T, 332）というものだが、トゥーゲントハットはここにおいてハイデガーが「…の通りに（so-wie）」という限定を除いていることを問題視する（T, 332f.）。彼によれば、単に思念されただけの事象と「自分自身に即して存在している」事象自身とを区別することにもとづいて、はじめて「真理」概念は成立する（T,335）。その前提に従えば、ハイデガーが結局は現存在の「開示性と真理とを単純に等置」してしまうことで、開示性は無制約的に拡張されている（T, 332f.）。つまり、開示性を単純に真としてしまえば、開示性にもとづく判断が自らの真理を作るということになり、そこでは真理の真理性が失われてしまう、と批判するわけである。さらにトゥーゲントハットによれば、ハイデガーが真理を規定している「暴露的（entdeckend）」という語はそもそも一貫的に用いられていない。ハイデガーは、「ロゴスが『真である』とは、（中略）存在者を、隠されていないもの（Unverborgenes）として見えさせること、つまり『暴露する』ことを意味する」（SZ, 33）と述べる一方で、「見せかけという様態の暴露されていること」（SZ, 222）とも述べる。このように「暴露する」という語が存在者をあらわにすることと存在者を隠蔽することとの両方に用いられているので、トゥーゲントハットは「偽であることの特定の意味と、真であることの特定の意味を規定する可能性は、全く残されていない」と結論する（T, 334）。

トゥーゲントハットの批判はハイデガーが観念的な判断内実とそれ自体で存在する事象自身との区別を撤去しているという点に向けられており、それによってハイデガーは真理基準を失い現存在の開示性を無制約的に「真」とみなすことになるわけである。このように一致関係という真理の判定基準を失っている点がトゥーゲントハットによって批判されるところであるが、ハイデガーは『存在と時間』第四十四節において「知性と事物との一致」というまさに一致関係としての伝統的真理観を批判する。ハイデガーによれば伝統的な真理観とは次のようなものである。まず、真であるのは認識、つまり判断で

ある。判断においては「実在的な心理的過程としての判断作用」と「観念的な内実としての判断されたもの」とを区別する必要があり、観念的な内実に関してそれが「真」であると言われうる。これに対して実在的な心理過程については、事物的に存在したりあるいはしなかったりするとされる。認識の普遍妥当性を問う場合、たとえ存在者を何かとして規定するカテゴリー的な形式が不変的に存立しているとしても、カテゴリーは可変的な「心理的」判断過程において個別的な具体的対象に適応され、その判断は主観の恣意性に委ねられうる。そこで、個別的な主観の判断遂行と普遍的な性格をもつカテゴリーである判断内実とを区別し、「表象されたもの」(SZ, 217) と実在的な事物との一致関係が証示されなければならないことになる。つまり、伝統的な真理観では、真なる判断において問題になるのは「観念的な判断内実」と判断の対象である「実在的な事物」との一致関係であるとされる (SZ, 216)。

ハイデガーは実在問題に含まれる混乱を、カントの表現を用いて指摘している。[4] 一致関係が問題になる際、判断の対象である実在的な事物は主観に依存しないで「それ自体」として存在するものと前提されている。実在性の意味への問いは「意識が実在的なものの『圏域』のうちへと超越していくことが可能かどうか」(SZ, 202) という問いと結び付けられているのである。外的世界の実在性を証明しようと試みるカントに対して、ハイデガーはカントがそもそも問題性の立脚点を主観のうちに、つまり「私の内」のもとにとっていると指摘し、「『私の内』と『私の外』との区別および連関をカントは（中略）前提している」と批判する (SZ, 204)。心理的なものとしてであれ物理的なものとしてであれ、主観と対象とがともに吟味されないままに事物的存在者として措定されたうえで、両者がいかに関係するのかということが問題とされているのである。

「知性と事物との一致」という伝統的な真理観においては「私の内」と「私の外」が、つまり心理的な事物的存在者である認識主観と実在的な事物である判断の対象との一致が問われるのだが、このように二つの事物的存在者が存在論的に規定されないままに発端に置かれているということこそがハイデガーの批判点である。伝統的な真理論の問題構成においては主観が事物的な存在者として措定されるとともに判断の対象もすでに事物的存在者として前提されており、それに関して判断

し規定すべき事物がすでに対象化されているという事態が無自覚のうちに遂行されてしまっているとも言えよう。それではハイデガーが述べるような「一致関係」を根本的な基準に据えない「開示性」としての根源的真理は、果たして真理の真理性格を無効にしてしまい自身の恣意的な主観的判断を無制約的に絶対化するものであるのか、この問題を検討していこう。

二　存在者の「自体存在」

ハイデガーによれば外的世界の存在証明として問われてきた実在性の問題には多くの「問いの錯綜」（SZ, 203）があり、実は外的世界の存在証明は外的世界の実在性について論じていないことが稀ではない。それは内存在の場としての世界と世界内部的な存在者としての「世界」とが区別されておらず、「ひとは『外的世界』の『実在性』への問いを、世界現象そのものを先行的に明瞭にしておくことなしに、設定する」（SZ, 203）ということに起因する。世界と世界内部的な存在者である「世界」とを混同した結果、外的世界の実在性をめぐる議論は主観に依存せずにそれ自体で存在する存在者の存在証明を試みているのである（SZ, 202f.）。ハイデガー自身も、世界ではなく「現存在にふさわしくない存在者の存在諸規定」（SZ, 44）である道具的存在性と事物的存在性とを、「実在性の様態」である「範疇」（SZ, 44）と術語づけている。伝統的真理観は、観念的なものと実在的なものという二つの事物的存在者を前提したうえで、主観の意味構成に依存しない自体的な存在者の実在性を問うていた。その際に実在性の概念は「それ自体」という性格と「依存しない」という性格が属しているものとして捉えられている（SZ, 202）。存在者を不断の事物的存在性という存在理念に定位して捉える限り、物質的自然を基礎的な層として、その上に量化されえない価値を表す述語である「諸性質」の層を貼り付けていくという方途がとられることになる（SZ, 98f.）。この見解によれば道具は「『価値の付着した』諸事物」（SZ, 68）とされ、裸の事物に主観が価値的に色付けをすることで構成されたものということになる。

外的世界の実在性問題が実は「存在者」の実在性をめぐる議論であると指摘する一方で、ハイデガーは「そもそも世界というものが存在しているのかどうか、また、世界の存在が証明されうるのかどうかという問いは、世界内存在としての現存在が設定する問いとしては（中略）無意味である」（SZ, 202）として明確に退けている。現存在にはつねにすでに世界が開示されているという現事実から出発せざるをえない以上、世界が存在するか否かということについてはそもそも語りえない問題なのである。そしてハイデガーは「世界内部的存在者の自体存在は、世界現象を根拠としてのみ存在論的に把捉される」（SZ, 75）と論じる。

ハイデガーは主観による事物の成層法的な構成という立場をとらず、次のように述べる。「道具的存在性は、『それ自体で』存在している通りの存在者の存在論的・範疇的規定なのである」（SZ, 71）。存在者は我々にまず裸の事物として出会われるのではなく、存在者はつねにすでに或るもの「として」現存在に出会われている。「世界内部的存在者の存在はある種の仕方でつねにすでに了解されている」（SZ, 201f.）のであり、すなわち自覚的な判断作用による規定に先立って、つねにすでに存在者はカテゴリー的規定と結合したかたちで有意義なものとして出会われているのである。例えば、我々にとって日常的な振る舞いにおいて道具として用いられるハンマーは、それが「家屋を固定する」という目的のために用いられるという連関の内にあり、そのための手段であるハンマーという道具「として」現出することができる。そのような存在者の全体における目的―手段連関である有意義性の指示連関、すなわち世界性が現存在に了解されているからこそ、個々の道具や存在者が何かのために有用なものとして見出されている。世界性は個々の主観の判断作用によって構成されるものではなく、公共的に我々に存立しているものとして我々がそれに従わなければならないものなのである。現存在は表立って自身の振る舞いを自覚する以前にすでに、意識的振る舞いに先立って構造化されている有意義性の指示連関のなかを生きてしまっており了解してしまっているのである。

有意義性の指示連関は現存在の目的のもとで有意義化されている。例えばハンマーは杭を打つことのもとで「適所性

(Bewandtnis)」を得るが、このハンマーは現存在が安全に家屋に住まうという目的において描かれる状況においてそのように有意義なものとして存在している。存在者が適所を得て有意義なものとして出会われていることは、現存在の側から言えば、「適所を得させること(bewenden lassen)」、「存在させること(sein lassen)」となる。この表現は、主観による価値付与や主観の気ままに存在者を従わせるかのような、存在者の意味が主観の認識能力や実践能力に根拠をもつものであるかのような印象を与える。しかしながら事態は全く逆であり、「存在させる」ということは存在論的には世界性を基盤とした「解放作用(freigeben)」(SZ, 85ff.)であって、現存在が世界性によって描かれている下図に従うことで現存在の振る舞いが可能になっているのである。

日常的に出会われる製品のうちには同時に「材料」への指示がひそんでおり、例えば革製品はなめし革や動物を、ハンマーや杭は鋼、鉄、銅、岩石、木材を、そのもの自体で指示している。現存在がどのように意図しようとも、布はそれ自体で帆船が風をはらむためには有用ではあっても風雨をしのぐためには役に立たない。「そのもの自体では作りだされる必要はなく、つねにすでに道具的に存在している存在者」や「自然産物という光のうちで見られた『自然』」もともに暴露されて有意義性の指示連関を成しており(SZ, 70)、世界性の連関はそもそも存在者「自体」によって下図を描かれているものなので、主観の価値付与に還元してしまうことができないものである。それゆえ「適所を得させる」というのは主観の実践能力によって基礎づけられる事態ではなく、或る道具的存在者を「それがいまや存在しているとおりに、また、それがそのように存在するように」(SZ, 84)存在させるということなのである。

世界が開示されていることは一定の状況においてなんらかの存在者が適切な位置を見いだすことを可能にする制約であるので、世界現象は世界内部的存在者の「自体存在(An-sich-sein)」の存在論的な根拠である(SZ, 76)。それゆえハイデガーは、「世界内部的な存在者の被暴露性の根拠は世界の開示性のうちにある」と述べ、現存在の「開示性」を「真理の最も根源的な現象」として規定する(SZ, 220)。「存在は、存在了解内容といったものがその存在に属している存在者の了解のう

ちでのみ『存在している』」（SZ, 183）と述べられる所以である。しかしながら注意しなければならないのは、現存在は、「現存在が差し当たって閉じ込められているおのれの内面圏域からまず出ていく」ことによって気まぐれに世界と何らかの関係を結ぶような存在者ではないということである。現存在は第一次的な存在様式からして、判断においてはじめて個々の主観が純粋な事物的存在に価値を張り付けていくのではなく、そのつどすでに暴露されている世界において出会われる存在者のもとで存在している、つまり「外部に存在している（Draußen-sein）」のである（SZ, 57, 62）。現存在には本質上すでに歴史的かつ文化的に伝承されている道具的存在者の何らかの連関が暴露されており、現存在は「世界」へとすでに差し向けられている（SZ, 87）。有意義性の指示連関である世界性は主観の気ままな構成ではなく、むしろ、我々が引き受けざるをえないようなものとして歴史的に現事実的に成立しているものなのである。それゆえ、「存在者は、存在者がそれによって開示され暴露され規定される経験や識別や捕捉には依存せずに、存在している」（SZ, 183）と述べられる。伝統的真理観やトゥーゲントハットの批判は存在者を価値の付着していない裸の事物と捉えたうえで存在者の現れる次元での真理を問題にしているのに対して、ハイデガーは、そもそも存在者が出会われて暴露されることを可能にする根底、すなわち存在者の存在が現存在に開示されてしまっているという事態を問題にしており[3]、それゆえ開示性を現存在の根源的真理として捉えているわけである。

三　解釈学的「として」と命題的「として」

ハイデガーは世界内存在の開示性を地盤とした日常的な存在者の理解である「解釈学的『として』」を根源的であるとするが、伝統的な真理観へも通じていく「命題的『として』」はそこからどのようにして派生してくるのであろうか。まずは解釈学的「として」の構造を確認しておこう。開示性は単に固定的な基底ではなく、現存在が存在しているという動性によっ

て変動していくものである。世界性の了解は、現存在の目的がある種の不確定さを含みつつ投企されることにおいて、一定の幅の活動空間を開示している。例えば屋内の同じ位置にいても、大きな杭を打ち込んで家屋を固定しようとする場合と壁に装飾を貼ろうとする場合とでは現われてくる道具は異なる。そのつどの目的の投企によって開示される活動空間は道具が現れるための基盤ではあるが、その諸指示連関はあくまでも非主題的であって、目立たないものでなければならない（SZ, 75）。例えばハンマーは、ハンマーというその存在者でもって、家屋の柱を固定することのもとで適所が得られる。家屋を固定することはまた、暴風雨に対する防備のもとで適所を得る。このような適所性の指示連関がそのつどすでに背景として了解されていることにおいて、世界内部的に出会われるものでもって何らかの適所性がそのつどすでに得られており、存在者が「家屋を固定するためのものとしてのハンマー」として解釈される（解釈学的「として」）。

ハイデガーは伝統的真理論が存在者を吟味せずに事物的存在性として発端に置いていると批判し、存在者の「自体存在」は道具的存在性であると主張する。しかしそれは存在者についての事物的把捉の可能性を排除しようとするものではなく、事物的存在性の規定が主観による意味の構成であるとか、道具の使用という「実践の消滅」によって主観が事物についての理論を構築するということを述べているのではない。道具の使用を差し控えることが必ずしも「理論」ではなく、実践にはそれ特有の「理論」が必要であるのと同様に、むしろ理論的研究もそれ固有の実践なしではないのである（SZ, 358）。存在者は道具的かつ事物的な連関において存在しており、仕事道具としてのハンマーはそもそも重力に従う物体事物としても存在している。家屋を固定するという暗黙の目的において仕事の道具を使用するときに、ハンマーが自分の腕力で扱うには「重すぎる」、ないしは杭を打つには「軽すぎる」と言うことがある。だがこの命題は、「われわれが配視的にすでにハンマーとして識別しているこの眼前の存在者は、重量をもっている、言いかえれば、重さという『性質』をもっている」（SZ, 360f.）というふうに理解されることもできるのである。存在者が道具的かつ事物的に存在しているということは、確かに道具的存在者の指示連関がうまく機能せず道具の使用をさし控えざるをえない場合に表立ってくることがある。杭を打つと

いう目的のためには軽すぎて使用不可能な金槌は「道具事物 Zeugding」として自身を示す。しかし事物的存在性は現存在の理論的態度によって構築されるのではなく存在者自体がもつ性格であり、世界性において存在者はそもそも道具的な指示連関のみでなく事物的な規定可能性とも連関をなしている。[6] 道具事物は「その道具的存在性においてそのように見えるものとしてたえず事物的にも存在していた」のである（SZ, 73）。

それでは存在者が道具的規定性においてあらわになるか、それとも事物的規定性においてあらわになるかということは、つまり道具との交渉から理論的態度への転換にとっては何が決定的なのか。それは現存在が存在者の何をめがけて投企するかということにある。例えば、さしあたりは道具的に存在しているハンマーという存在者が何らかの陳述の「対象」になると、「それでもって、従事し実行すべき道具的に存在する道具的対象」は、「それに関して提示しつつ陳述すべき『事物的対象』」になる（SZ, 157）。したがって存在者を「不断に事物的に存在するもの（物質）」として解明する数学的物理学は近代的自然科学の典型であるが、数学的物理学の形成にとって決定的なことは「自然自身の数学的投企」にある（SZ, 362）。数学的投企が存在者をその事物的存在性をめがけて先行的に暴露することで、科学の主題的な存在者が量的に規定されうる構成的な諸契機（運動、力、場所、および時間）に対する地平を開くのである。数学的投企は存在者を初めて「定立する」のではない。数学的投企が成すのは、存在者が「客観的に」問いかけられ規定されうるものになるように存在者を「解放する」ということである（SZ, 363）。その際に事物的存在性を暴露することにおいて事物的存在者をそのもの「として」規定する当の「固有性」は、あくまでも「その事物的存在者そのものから」汲みとられるのである（SZ, 158）。[7] 事物的存在性が主題化される際には、「道具的に存在している道具のもつ環境世界的に枠づけされた所在の場所の多様性が、純然たる位置の多様性へと変様されるばかりではなく、環境世界の存在者が総じてその枠づけを除去される」（SZ, 362）のであり、当該の学の投企は道具やその道具連関ではなく、存在者の数学的規定という「事物的存在者の被暴露性」のみを暴露しようと努める（SZ, 363）。ハンマーが事物的に存在する物体事物として主題化される際には量的な規定のための水平化

された関連が開かれ、自分の腕力との関連や杭を打つという目的などの、それとの連関において重すぎるないしは軽すぎると言われた状況は覆われることになる。開示性を基盤としつつ存在者を暴露することである真理は「現存在に適合したその本質上の存在様式に応じて、現存在の存在との相対関係にある」のだが、暴露しつつ現存在は存在者の「表象」に関わるのではなく存在者自身に当面するがゆえに、「現存在の気ままを禁じられうる」のである（SZ, 227）。

多義的な指示連関にもとづいている「解釈学的ロゴス」から、理解可能性と方向づけとが事物的存在性へと制限されて投企されることによって、論理的あるいは数学的諸法則によって規制されている「命題的ロゴス」の次元が成立する。「このハンマーは重い」というふうにハンマーを重さという固有性をもつものとして命題的な「として」において「判断」することを、ハイデガーは「提示（Aufzeigung）」、「述語づけ（Prädikation）」、「伝達（Mitteilung）」を特徴とする「陳述（Aussage）」の構造として明らかにしている（SZ, 153ff.）。それによれば陳述は第一に提示であり、道具的存在性という在り方における存在者を見えるようにさせる。すなわち、仕事場にあり杭を打つのに適しているという有意義性の連関におけるハンマーである。第二に述語づけであり、そのハンマーを或る述語づけへと狭小化する（Verengung）。つまり、有意義性の指示連関を基盤としつつ、ハンマーを「重すぎる」という規定性に焦点化して表立ってあらわにする。第三に伝達であり、その規定性においてあらわになっている存在者を世界のうちで我々に共に見えるようにさせる。重さという固有性をもつものとして事物的存在性においてハンマーを規定する陳述（判断）はこうして「命題的『として』」という機能をもつのだが、それはそもそも開示された世界性を基盤としつつ、それを規定するという仕方で提示するものなのである。ところが、世界性にもとづいて何らかの被暴露性へと向けて存在者を解放するという開示性の動的な在り方が見落とされ、その結果として対象の固有性「として」解釈されたものにすぎない命題的ロゴスと対象の区分が無前提のうちになされると、主観の価値付与を免れた純然たる事物が暴露された状況を離れて不変的性質を有するかのように前提されてしまい、知性と対象との一致という伝統的な真理観が構築されることになる。伝統的な一致説における決定的な問題は主観と対象とを相互に依存せずに存在し

ている事物的存在者として措定しているという点にあるが、それは道具的かつ事物的な存在者のもつきわめて多義的な有意義性の指示連関が忘れ去られることによって、世界性を基盤とした存在者の立ち現わる場面に即してその規定性を再審するという構造が見落とされるからである。このような問題提起の仕方では、もともと両者の関係を可能にしている根源的な真理が見えてこない。ハイデガーの立場にからすれば、世界性という全体論的で適所的なコンテクストがなす地平にもとづいて存在者が暴露されて表現されることによって、存在者についての命題的な規定性の真偽がそのつど証示されることができ、正当性を審問されることができるのである。

四　真理と非真理の等根源性

現存在が存在者を配慮するためには世界性である有意義性へと没入していなければならない。現存在と世界とのこの「親密性」を根拠として世界内部的存在者が出会われるのだが、それは他方では、現存在が「世界内部的に出会われるものにおのれを喪失して、このものによって気を奪われる」（SZ, 76）ことの根拠でもある。それゆえ現存在は、存在者のもとで振る舞いつつあるために「世界のなかに自己を喪失」し、「頽落」（SZ, 222）している。現存在が頽落しつつあるということは、現存在が「『非真理』の内で存在している」ということを意味する（SZ, 218）。すなわちハイデガーは、開示性を根源的真理としつつも、開示性もまた隠蔽という在り方をとりうるものとして捉え、「現存在は等根源的に真理と非真理との内で存在している」（SZ, 223）と述べる。

伝統的真理論は根源的な真理現象を根拠にしながらもそれを見落とし、一致という理念へと行きつかざるをえなかった。それに対してハイデガーは一致関係としての伝統的な真理基準を問うことをそもそも可能にする次元である開示性を根源的真理とするのだが、その開示性自身のうちに開示性を見落とさせるように導く契機が含まれていると論ずる。そうであると

すれば伝統的真理概念はハイデガーの真理論によって単純に排除されない。むしろ開示性と被暴露性というハイデガーによる真理の定義は、伝統を「振り落とす」ものではなく、伝統を「根源的に我がものとした」ものなのである（SZ, 220）。最後にこの点を、「真理と非真理とは等根源的に真理」であるとするハイデガー真理論から考察したい。

ハイデガーによれば、「現存在は真理の内で存在している」という命題は、実存論的・存在論的な意味においてそれと等根源的に「現存在は非真理の内で存在している」ということを述べている（SZ, 222）。現存在は本質上おのれの開示性であるので、現存在は「真理の内で」存在している。第一次的に「真」であるのは開示性であり、暴露しつつある現存在である。第二次的な意味における真理は、暴露されていること、つまり存在者の被暴露性である（SZ, 220f.）。ところがさしあたりたいていは現存在は世人の内に没入して頽落しており、「公共的な解釈成果（Ausgelegtheit）」の支配下にある。公共的な解釈成果の支配下において、暴露され開示された存在者は完全に秘匿されるわけではなく暴露されてはいるのだが、同時に偽装されるという様態をおびる。現存在は本質上頽落しつつあるので、以前暴露された存在者が暴露されると同時に偽装されて秘匿されているという「非真理」の内で存在しているのである（SZ, 222）。つまり真理である開示性には本来的なものと非本来的なものとがあることになる。

非本来的な開示性である非真理とは、空談において公共的な解釈成果を語りまね語り広めることで平均的な了解可能性をつくりあげることである。空談においてひとは存在者がどのように解釈されているかという被暴露性のみを表面的に理解し、話題とされた存在者との第一次的な存在関連を喪失してしまっている、ないしは決して獲得したことがない。平均的な了解は単に解釈成果を語りまねるだけなので、「万事を了解しており、もはや何ひとつとして閉鎖されてはいない」と思い誤り、そうして「あらゆる新しい発問やすべての対決を抑止し、特有の仕方で押さえつけ遅らせる」（SZ, 169）のである。こうして「事象が先行的に我がものとされることなしに、万事を了解する可能性」（ibid.）が作られていくことで、「全ての真正な了解すること、解釈すること、および伝達すること、再び暴露することや新たに我がものとすること」（ibid.）が奪われて

しまう。平均的な了解可能性においては、事象が「我がものとされる際に挫折する危険」(ibid.) すら現存在から奪われているのである。非真理は公共的な解釈成果に従うことで、世界性を基盤としつつ語られている存在者がどのような目的をめがけて投企されることで暴露されたのかという状況へとさかのぼることを中止するので、存在者は暴露されつつも地盤から切り離されてしまうことになり、「閉鎖」なのである。

伝統的な真理観はハイデガーの述べる非真理を捉えたものに他ならない。そもそも陳述(判断)は、存在者を暴露しつつ或る被暴露性において、つまり或る規定性において表立って解釈するものである。ところが陳述が言表されると、その言表内容は暴露された存在者との連関を備えつつその被暴露性を保存するものとして語り継がれていくことができる。すると、言表された陳述が存在者を暴露しているということは、「被暴露性を保存する陳述が存在者と関連づけられている」ことと変わらないこととして捉えられることになる(SZ, 224)。こうして存在者を規定する陳述(判断) とその対象とがともに事物的存在者として解され、両者の一致という伝統的真理観が生じる。

本来的な真理である本来的開示性は、つねに秘匿性という在り方からの一つの「略奪」(SZ, 222) という仕方において、すなわち非真理が現存在自身に対して遮断している「隠蔽や不明瞭化の撤去として、またそうした偽装の破砕として」遂行される(SZ, 129)。すなわち本来的真理とは「いちはやく暴露されたものを見せかけや偽装に逆らって表立って我がものにして、被暴露性をたえず確認しなければならない」(SZ, 222) ということなのである。ハイデガーは「現存在の、本来的な真理であるがゆえに最も根源的な真理」を「決意性(Entschlossenheit)」と術語づける(SZ, 297)。決意性は「世界」の被暴露性と他者たちの共現存在の開示性とを等根源的に変様させるのだが、それは道具的に存在している「世界」が「内容的」に別のものになるわけでもなく、他者たちの範囲が取り替えられるわけでもない(SZ, 297f.)。真理(被暴露性)はすでに暴露されている存在者との関連へとさかのぼり、改めて何らかの目的を投企することで存在者を開示するのである。例えば、単に「ハンマーは重い」という解釈成果が語り継がれて伝承されることにおいてあたかも「重い」という不変の性質

をもつかのように暴露されていた存在者が、小さな釘を打つには重すぎるハンマーとして、また力持ちの隣人に貸すには手ごろなハンマーとして、そのつどの目的によって開示される状況において再解釈され暴露され直すのである。また、「このハンマーは三キログラムである」という伝承されている規定性は、その存在者の現われに立ち戻ることにおいてのみ真偽を確証され直すことができる。「決意はまさに第一にそのときどきの現事実的な可能性を開示しつつ投企して規定することである」（SZ, 298）とされるが、それはあたかも不変的なものかのように硬直化してしまった解釈成果という真理を「取り消すder *Widerruf*」と同時に、その根源的な連関へと立ち返って「取り返し*Wiederholung*」していくという営みなのである（SZ, 385）。本来的真理は全くの秘匿性から与えられるものではなく、隠蔽という様態をとって伝承されている被暴露性を土台として遂行されるので、「決意性は非真理を本来的に我がものとする」ことなのである（SZ, 299）。

現存在の開示性はそのつど生起する可変的で可動的な根源的な場であり、それにもとづく真理は歴史的なものである。真理はそれが暴露的に関わっている状況における働きに支えられ、そしてまたその限りにおいてのみ真理であり、たえず隠蔽性から奪取され、また奪取され続けざるをえないものである。「真理」はどんなに閉鎖的で自己完結的なものであるかのように立ち現れようとも、その本質からして完了態たりえないのである。ハイデガーの真理論は永遠の真理を範型とするものではなく、むしろ、そのつどそのつど暫定的に確定されていく真理である。ハイデガーによれば、「永遠の真理」なるものは「永遠にわたって現存在が存在していたし存在するであろうと証示することが成功したときに初めて、十分に証明されるであろう」ものであり、そのような主張は結局は「哲学的な問題性の内部で長いことまだ徹底的に駆逐されていないキリスト教神学の残滓に属する」（SZ, 229）ものである。我々に与えられる真理は歴史的真理でしかありえないが、暫定的に確定される真理をたえず取り消して取り返していくという営みを通してこそ、そのような歴史的真理が恣意的に硬直化して絶対化することを阻み、開示としての真理を我がものとすることができると言えよう。

おわりに

以上によって、ハイデガー真理論は伝承されている存在者の規定性を状況において再審するということであり、存在者との関連を絶えず更新していくというものとして積極的な意義をもつことが明らかになった。現存在はつねにすでに世界のうちへと投げ入れられてしまっているという事実を引き受けざるをえない。現存在に委ねられていることは、自らの有意義な世界への関わりを遂行しつつ取り戻すという可能性である。このことによって我々は歴史性によって根源的に規定されつつも、それぞれに価値や世界を生き生きとした相貌において生き直す可能性もきりひらかれてくるのである。

『存在と時間』において本来的な開示性である真理は、頽落において存在者が暴露されると同時に隠蔽されているという「非真理」を、決意性を介して打破することである（SZ, 221f.）。しかし『哲学入門』においてハイデガーは、「或るものが顕わであることは、それ自身に於いて同時に伏蔵態、本質的な意味での非―真理である」と述べ、真理には非真理が排除できないものとして内包されている、と洞察している（GA27, 334）。歴史的に規定されている真理には何かしらの制約が潜むのである。このような真理概念の変様については、ハイデガーの芸術論や自らを示しつつ隠れるという存在の性起を主題化する後期の思索とも関連づけて、改めて考察していく必要がある。

註

（1）M.Heidegger: *Sein und Zeit*, Niemeyer, 1927, 2001[18]. 以下では略号（SZ）を使用してページ数を記載する。

（2）以下、原著者による強調は傍点、論者による強調は傍丸によって示す。

（3）Tugendhat, E.: *Der Wahrheitsbegriff bei Husserl und Heidegger*, Walter de Gruyter, 1967. 以下では略号（T）で示す。

（4）ハイデガーは実在問題への批判点を、カント自身の実在問題をめぐる表現の内に見出して指摘している（SZ, § 43）。しかしながらカントへの批判という体裁をとりつつも、実際は「『実在性の問題』を解決する試み」である同時代の認識論的な問題関心への立場の表明であろう。Cf, SZ, 155f., 218Anm. 6

（5）開示性は開示作用としてそのつど生起し、認識に先立って認識がそこで可能となる場を開くものである。ダールストロームも、ハイデガーの真理概念をカントと同様に超越論的論証を意図するものであると解している。Cf.Dahlstrom, D.O.: *Heidegger's Concept of Truth*, Cambridge University Press, 2001, pp. 414-23

（6）事物的存在者は実践の消滅によって道具的存在者から単に派生してくるものにすぎないのではない。池田喬は存在者はもともと道具的かつ事物的に存在していると述べ、この意味において両範疇の同等性を主張している。池田喬「道具・事物・自然―ハイデガー『存在と時間』と実在問題―」、『哲学・科学史論叢』第十二号、東京大学教養学部哲学・科学史部会、二〇一〇年、八四―八六頁参照。

（7）「操作的真理モデル *das opelationale Wahrheismodell*」にもとづいてハイデガーの真理論を理解するゲートマンは、「基礎をなす状況において手段が目的を現実的に達成しているとき、言明は真である」（s. 158）と述べる。このモデルにおいて誤解されてはならないのは、真理は存在者自体を特定の規定性において解放する営みであり、存在者を何かとして暴露して規定するという行為は主体が何らかの動作を行うという能力に還元されるものではないという点である。Cf.Gethman, C.F.:*Dasein.Erkennen und Handeln Heidegger im phänomenologischen Kontext*, de Gruyter, 1993, s. 156ff.

（本学大学院博士後期課程・哲学）